

ナンキンコゾウについて その1

井上 吉典

ナンキンコゾウという言葉に聞き覚えはありますか？

なんともまあ奇妙な語感、不思議なイメージの言葉だけれど、今の日本でこの言葉を知っている人というのはまず千人に一人もおりますまい。「日本社会の家族的構成」という本の中で私はこの言葉に出会った。著者は川島武宣という法社会学者であり、終戦直後の昭和23年に出版されている。因みに、その分野での古典となっているようである。ナンキンコゾウが登場するのはこの論文集の中の「日本封建制のアジア的特質」という論文であり、「奴隷制の一形態としての養子」という副題がついている。

山形県の沖合に飛島という孤島があるが、同書によれば、ナンキンコゾウとは、かつてこの島の労働力不足を補うために本土から連れて来られた貰い子である。ここで、少し長くなるが、川島の説明を聞いてみよう。

「古くからこの島にはナンキンコゾウと呼ばれる男の子の養子があった。主として酒田附近の農村（飽海郡）、ときには東田川郡の農村からももらってきた。小学校二、三年生くらいのころまでにもらうのが多く～中略～子供を食べさせることができぬような極貧の農民からもらった。～中略～無償でもらってくるのが普通であった。戸籍上養子にする者もあったが、多くはただこの村に寄留籍をおくにとどまった。このことは、奴隷関係が期限つき（後述）で、数え年二一歳になると解放されたことと関連しているようである。しかし、かれらは明確に「貰い子」として意識されたのであり、戸籍の記載の形式はここでは重要な意味をもたない。かれらの待遇は実子よりも悪く、食べ物も実子とは違っていた、という。漁業の他日常の労働にも相当ひどく使われた。しかも昔ほど待遇は過酷であった。～中略～飛島のナンキンコゾウの苦境は相当に有名であったとみえ、庄内地方の農村では、子どもが親のことをきかぬと、親は「飛島へやるぞ」といって叱ったものだそうである。ナンキンコゾウをもらう主な目的は、漁業、とくに北海道沖の鰹漁業に乗り組ませるためであった。」

飛島は周囲10km余りの極めて小さな島である。耕地面積はごくわずかであり、島民は専ら漁業で生計をたててきた。漁業と言っても沿岸漁業が中心だが、冬になると北海道沖まで鰹を獲りに行っていた。ナンキンコゾウは主に冬季の鰹漁のために連れて